九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

“Locative+Verb+Subject” 型文の語用論的側面

河上，誓作

https://doi.org/10.15017/2332703

出版情報：文學研究. 75, pp.1-13, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

“Locative＋Verb＋Subject” 型文の語用論的側面

河　上　誓　作

1. 序

次の２文の斜体の部分はいずれも “Locative＋Verb＋Subject” という構成をなしている点で類似している．

(1) I opened the bedroom door, and *out walked the cat.*

(2) *On the table lay a dagger.*

ところが，(1)文の *walked* が運動の動詞 (a verb of motion) であるのに対し，(2)文の *lay* は存在を表わす動詞 (a verb of existence) である点で，２文は互いに異質にみえる。

小論の目的は，次の３点からこの種の文の語用論的側面を考察することである．まず，(a)話者の視点（または位置）に着目して，(1)，(2)に類する文がもつ語用論的特徴を明らかにすること，さらに(b) (1)，(2)に類する文は一見互いに異質にみえるが，根本的には共通した語用論的特徴をもっていること，さらに進んで，(c)この異質な面と共通な面は互いに矛盾するものではないこと，以上の３点である．

2. 運動の動詞 (verbs of motion) を伴う場合

Longuet-Higgins (1976) [1] の指摘するところによると，次の２文における語用論的差異は以下の通りである．

(1) I opened the bedroom door, and *out walked the cat.*

(3) I opened the bedroom door, and *the cat walked out.*

(1)では話者 'I' は恐らく寝室のドアの外にいるという推測がなりたつのに対し，(2)ではそういう推測がなりたたないという点である．もしそうだとすると(1)の斜体部分の邦訳は，「ネコが出てきた」とならなければならないことになる．

それでは何故上にのべたような語用論的差異が生ずるかであるが，これについては Longet-Higgins は一言も触れていない．私見によると，これは表現上の perceptual strategy に関係しているように思われる．(1)文の後半は "Locative＋Verb" が先に来て， Subject が最後になっているので，主述関係が正常の語順の逆である．それ故文の最後まで主語がわからないことから来る dramatic effect が効を奏することになる．(1)の解釈はそれ故，「'walked out'したのは（何かと見れば）'the cat' だ」ということになる②．しかも，上の dramatic effect が生きてくるので，'the cat' は情報的価値が一番高く，したがって，意外さや驚きの感情がこめられることになる．これらのことを頭において(1)を和訳してみると，

(1)' 私は寝室のドアを開けた，すると出て{a. 来た / b? 行った}のは（何かと見れば）そのネコだった．

となり，可能性としては２つの訳があることになる．ここで２つのうち（1'b）が不適当にみえるのはどういう訳であろうか．この問題は，ドアをはさんで接する寝室内外の２つの空間に「私」，「ネコ」が存在したその在り方と関係している．考えられる組合わせとしては，４組ある．

(A) 「私」・「ネコ」：共に外
(B) 「私」・「ネコ」：共に内
(C) 「私」：外，「ネコ」：内
(D) 「私」：内，「ネコ」：外

これらのうちどれが一番適切かということになるが，まず，(A)はすでに共

に外にいるので対象外となる．さらに，上の dramatic effect から生ずる Subject への意外さや驚きを考慮すると，「私」と「ネコ」が同じ空間にいたことはまず考えられない．同じ空間におれば既知である可能性が大となり，上の驚きの効果は生じないはずだからである．よって(B)の可能性が消されることとなる．上の (1'b) がおかしいのは，この(B)の可能性が消されたからである．残りの(C)，(D)のうち，(D)は「ネコ」がすでに寝室の外にいるので，全くあてはまらない．結局のところ，(C)がこの情況では一番適切な組合わせとなる．逆に(C)であれば， (1'a) の訳とぴったり一致するので問題はない．

以上が何故(1)文が「ネコがでて来た」とならなければならないかの理由づけであるが，この説明は(4)以下のこの種の構文にもいずれもあてはまるように思われる．一方(3)であるが，これは(1)文のような統語上の特徴がないために，常に「ネコがでて来た」とならなければならないことはない．つまり「ネコがでて行った」となる場合もあるわけである．

以下この節では Longuet-Higgins の用例のいくつかについて，筆者自身の考察をまじえながら氏の説を布敷することにより，この種の表現のもつ特性を明らかにしたい．

次の4文は(1)文と同じく， open space と closed space のどちらの側に話者（＝観察者）が位置しているかに関係している．

(4) Out of the cave charged an elephant.
(5) Into the cave charged an elephant.
(6) Out of the cranny scuttled a mouse.
(7) ? Into the cranny scuttled a mouse.

(4)は，「洞窟の外へ突進してでて来たのは（何かと見れば）一頭の象であった」というのであるから，話者は洞窟の外で観察していることになる．一方(5)は「突進して入ってきた」のであるから，話者は洞窟の内部にいなければならない．(6)も(4)と同じで，「割れ目からあわてて出てきたのは

（何かと見れば）一匹のネズミであった」のであるから，話者は当然割れ目の外から観察していることになる．同様に(9)は「割れ目の中に入ってきたのは（何かと見れば）一匹のネズミであった」ということになる．しかしここで困るのは，人間である話者（＝観察者）が，ネズミが通るような小さな割れ目の中に位置することは，童話の中のような特別な世界を想定しない限り，一般常識では誠に不自然な点である．それ故 '?' が付加されることになる．

(4)—(7)の例は，平面で接する2空間での話者の位置関係が問題になっていたが，次の3例では上下に接する2空間が関係している③．

(8) Up the ladder climbed three firemen.
(9) Three firemen climbed up the ladder.
(10) Down the bean-stalk climbed a giant.

(8)では話者は，はしごの上かまたはそれに近い位置から見下ろしている場合で，「はしごをあがってきたのは（見ると）3人の消防士であった」という情況であるが，(9)の場合は位置関係がそれとは逆で，話者は恐らくはしごの下にいて見あげているのであろう．これに対し(10)の場合は，巨人が豆の木の茎をつたって下りてくる姿が見えてきた状況であって，話者（＝観察者）が豆の木の下から見あげていることになる．

以上(4)—(10)の例文の観察から明らかな点は，いずれも相接する2つの空間において話者のいない空間から話者のいる空間に向って或る対象物が出現してくるというパタンが繰り返されていることである．これを Longuet-Higgins は簡潔に 'coming into view' という言い方で表わし，この種の表現のもつ意味の essence であるとしている．確かにこの説明をもってすれば，次の2文が不適当な文であることも納得がいく．

(11) ? Into the pub disappeared Stuart.
(12) ?? Into the summerhouse strode I.

(11)では，話者は 'the pub' の内部にいるのであるから，その中へ 'disap-

peared' というのは不自然である．つまり中にいるのなら目に映ってこなければ，つまり 'appeared' でなければおかしいというのが '?' の理由であろう．話者のいない空間から話者のいる空間に Stuart が 'disappeared' というのであるから，解釈がすんなりといかない訳である．この文が Stuart disappeared into the pub. となっておれば，話者が必ずしも居酒屋の中にいなくてもよい構文であるから問題はない④．

⑿は話者と動作主が同一人であることからおかしなことになっている．話者はすでに 'summerhouse' の中に位置していると考えられるにも拘らず，入ってきて話者の目に映ったのが話者と同一人物の 'I' というのであるから，常識的な解釈はむずかしいことになる．つまり，両方の空間に同一人物がいることになり，話者のいない空間からいる空間への出現というこの種の構文の在り方と矛盾するわけである．なお，この場合も，語順が正常であれば，問題はない．

以上の考察から明らかになるこの種の構文の語用論的特性について，以下3点から整理してみたい．

まず，この種の構文の語用論的特性の essence を Longnet-Higgins は 'coming into view' と呼んだのであるが，これは筆者の言い方ですれば，相接する2つの空間において話者（＝観察者）のいない空間から話者（＝観察者）のいる空間に向って或る対象物が出現すること，ということになる．つまりこの種の構文は，動作の deictic meaning を表わしうるわけで，この点に留意することが大切である．例えば，例文の(1)，(4)，(5)，(6)，(8)，(9)，⑽で用いられている運動の動詞は，いずれもその動作の方向性（deixis）に関しては中立的な動詞であり，'coming into view' という構文的意味と前置詞（または副詞）の意味とが総合されて話者がどの位置にいるかが明らかになるという仕組みになっている．

この点で特に注意すべきは，日本語にこれらの文を和訳する場合である．*walk* や *climb* はこれだけでは deixis に関しては中立的で，歩いて

行くのか歩いて**来る**のかは不明である．walk out／into ; climb up／down と副詞をつけてみてもこの中立性はまだ保たれている．例えば walk out では，歩いて出て**行く**のか，歩いて出て**来る**のか明らかではない．そこで，'L＋V＋S' の構文がもつ 'coming into view' という deictic meaning が加わり，やっと方向性をもった動作表現として完成する．和訳の際注意すべきというのは，この最後の deictic meaning を落さないようにという点である．上にみたように，この意味に対応する日本語は「……（して）くる」がぴったりであろう．問題は，「……（して）くる」という日本語 (lexical unit) に対応する英語の lexical unit が，walk out／into や climb up／down 自体の中には見当らないということであろう．

ところで，この種の構文では deixis を含む動詞は全く用いられないのかというと，そうではない．次は *come* と *go* が用いられた例である．

(13) But he could not open the box——it would not open! Then he hit it once with his hand. It opened ; and *out came the dog whose eyes were as large as eggs*! (West, *SFFT*) ⑤

(14) Just then the door opened, and *in came the King's men.* (Ibid.)

(15) Hans ran and put her on the dog's back, and *away went the dog through other streets.* (Ibid.)

(13), (14)の 'out came…', 'in came…' は，それぞれ，「…出て来た」，「…入って来た」に相当し，この種の構文のもつ deictic meaning と矛盾しない．ところが(15)の場合はすこし様子が異なる．この場合は，すでは眼前にいた犬が視界から消えたのであり，明らかにこれまでの 'coming into view' という原則と矛盾するように見えるからである．このことは次の例を見ると一層はっきりする．

(16) *Away went the dog*, and soon it came back again, bringing a box of money in its mouth.

(16)では，犬が話者の眼前からひとまず消え去り，ついで一定の時間経った

あと再びその同じ犬が同じ位置に戻って来たことをのべている．

決論から先にいうと，これまでのべてきた 'coming into view' の原則と，(15)，(16)の用例とは矛盾するものではない．すなわち，(14)までの用例においては．対象物が視界に新たに登場してきたという意味で 'coming into view' であったが，(15)，(16)においては，すでにコンテクストに登場している対象物に関して新たな *event*（事態）が眼前に生じたという意味で 'coming into view' であると考える方が妥当であるからである．例えば，(16)では，'the dog' はこのコンテクストには既に登場していて，ここでの描写の中心は，その犬が新たにどうなったのかということである．それ故，(14)までの用例とは違って，'Away went the dog' の 'the dog' には情報上の期待はほとんどなく，'Away went …' の部分が記述の中心となっている．その犬が立ち去った，という（予想しなかった）新たな event が眼前に生じた，というのが(16)の斜線部分の意味である．(15)についても同様のことが言える．ここでの記述の中心も既に登場している 'the dog' にはなくて，その犬が今眼前で新たにどういう事態になったかにあり，それを表わしている 'away went … through other streets' が描写の中心部分である⑥．

こうみてくると，Longuet-Higgins の 'coming into view' という概念は，新たな対象物が眼前に登場する場合のみに適用するのではなくて，もっと広義に解して，「新たな event が眼前に発生する」場合も含めて解釈した方が適当のように思われる．特に *go* のような視界の外へ向かう deixis をもった動詞を伴う場合は，上にみてきたように，後者の解釈が適当のように思われる．

さて，この種の構文の語用論的特性の第2は，上でも触れたが，この種の構文が情報上 dramatic effect をもつという点である．例えば，(13)，(14)，(15)からもわかる通り，この型の文では次に何が起こるかについて一種の緊張状態が存在する．特に新たな登場物が眼前に現われてくる場合などは，まず，視界に入ってくる際の在り方の表現 (Locative+Verb) が先に

きて，それから動作の主体が最後にくるので，読む方は動作の主体に対する期待が最後まで取っておかれることになり，その点で dramatic な効果が一層高まるのである．例えば⒀では，「箱が開いた．出て来たのは（何かと見れば）目が卵ほどもある犬ではないか！」という具合に，驚きの効果が遺憾なく発揮されている．それ故，この種の構文では，Subject の部分にはそのコンテクストで情報価値が高いものか，または新情報となるものが来ることが多く，従って不定冠詞のつく場合とか，定冠詞がついていても修飾語句の多い表現が目立つことになる．⒂の場合のように，新たな event が生じたことを表わしたい表現の場合でも原則は同じであって，この場合は，先にも触れたように，新しい event の在り方の記述，つまり '(away went) …through other streets' が dramatic な効果を与えることになる．

この種の構文のもつ語用論的特性の第3は，この型の文が普通の会話文の中では現われず，専ら読んだり聞いたりするために書かれた記述文にのみ現われるという点である．つまりこの型の文は，話者（＝観察者）が読者または聞き手のイメージの世界に話者の観察した状況を描かせる類の文であって，それ故に上に述べた表現の劇的効果が重要で，一層効果的になってくるのである．なお，普通の会話文でこの種の表現がまったく用いられないというのではない．例えば次の例がある．

⒄ Here comes Betty
⒅ There goes our train

しかし Longuet-Higgins も指摘しているが，⒄，⒅の如く，会話文では Locative が直接的表現であるために，これらの表現が用いられる際には gesture を伴うのが普通である．このことは次の例文を見れば一層明らかである．

⒆ Trent pointed. '*There he is*, straight in front of you, in the middle of that flower-bed…'④

以上この節の考察から，運動の動詞を伴う 'Locative+Verb+Subject' 構文の語用論的特性は，次の3点に要約できよう．まず，この種の構文は，予測しない対象または事態が視界に現われて来る (coming into view) 場合の記述に最も適した構文であること．第2に，この構文による記述が劇的効果を伴うこと．第3に，この構文は読んだり聞いたりするために書かれる記述文の中にのみ現われる類のものであること．以上の3点である．なお，第1点について一言つけ加えるならば，対象または事態が話者（＝観察者）の視界に現われて来るのであって，その意味では話者（＝観察者）はその直前の記述のコンテクストの視点から新たに視点を動かす必要はまったくないということである．これは動詞が運動の動詞であることからくる特徴であり，この点が，次節で述べる存在の動詞の場合と根本的に異なる点である．

3. 存在の動詞 (verbs of existence) を伴う場合

この節では，筆者が存在の動詞と呼ぶ一連の non-motional verbs (*be, lie, stand, be sitting, be put*など) を伴った 'Locative+Verb+Subject' 構文を考察する．まず用例を見てみよう．

(2) On the table lay a dagger.

(20) "Is this your country?" she said. But there was no answer. Near her stood ten white birds. They could not speak. (West, *SFFT*)

(21) She looked about her. It was a beautiful country. At her feet were the prettiest flowers she had ever seen. On all sides were great trees. In front of her were hills, and on one of the hills was a great white house, with many windows. (Ibid.)

(22) If you open one door and go into the room you will see a big box. On the box is sitting a dog with eyes as large as eggs. (Ibid.)

(23) Then my friend sat upon another bed. On the bed with him were put six little loaves of bread and a small jar of water. (Ibid)

これらの例文において運動の動詞の場合と著しく違っているのは，Locative の表現における前置詞の性質である。上例の on, near, at, in はいずれも「（静止）位置」を表わす前置詞であり，運動の動詞の場合にみられた into, out of, out, in, up, down など運動の方向を示す副詞や前置詞と著しい対照を示している．それ故存在の動詞を伴う"Locative＋Verb＋Subject"構文においては，「（静止）位置」＋「存在動詞」＋「対象物」の構成となり，話者は聴者にまず特定の場所を認識させ，次いでそこに存在する対象物を認識させるという順序をとっていることになる．このように存在の動詞を伴う場合は,「ある特定の位置に，ある対象物が存在する」という表現内容だから，運動の動詞の場合のように対象物は動いて視界に入ってはこない．しかしよく観察してみると，Locative の表現の名詞句（⑳の例では her—以下カッコ内は⑳の例）はすでに当該コンテクストには恐らく直前の文あたりで登場済みの要素であり(she),その要素の然るべき位置(Near her)にまず読者を着目させて，その上であるもの(ten white birds)が存在すると述べるのであるから，読者（または聴者）のイメージの世界では,その対象物が新たに視界に入ってくる(coming intoview) ことはまちがいない．ただ運動の動詞との相違点は，たいていの motional verbs の場合，対象物が動いて視界の中に入ってきてくれるのに対し，存在の動詞の場合は，当該コンテクストに既出の名詞から，読者の目を前置詞句が表現する位置にまで移さなければならない点である.つまり,㉒の例文でいえば，読者の目は直前のコンテクストでは 'a box' 全体にあるが，次のコンテクストでは，その箱の 'on' の位置まで移されている．移されたあとで，'a dog…' が視界に入ってくるのである．この意味で運動の動詞の場合にのべた第1の語用論的特性は存在の動詞の場合にもあてはまるということになる．

運動の動詞の第2の語用論的特性としてあげた dramatic effect に関しても，運動の動詞の場合とまったく同じである．このことは例文⑳—㉓を見れば明らかであろう．特定の場合を規定して，その上で対象物を導入

するやり方であるので，導入される要素は当該コンテクストでは新情報であり，またその文中では情報量が一番高い要素となる．この点はすでに運動の動詞の際言及した通りである．なお，この構文も(21)のようにいくつもたたみかけるように用いられると，dramatic な効果がさらに強化され，一層写実的な記述が生ずるのは言うまでもない．

前節の第3の特性についても運動の動詞を伴う場合と同じであって，存在の動詞を伴うこの種の構文も，読んだり聞いたりするために書かれる記述文の中にのみ現われる類のものであるといって差支えないであろう．なお，存在の動詞を伴うこの種の表現が会話文で用いられた一例が(19)であるが，この場合も直接的な gesture を伴っていることは，先にみた通りである．

4. まとめ

こうみてくると，運動の動詞の場合も存在の動詞の場合も，語用論的特性は変らないということになる．ただ違うのは，用いられている動詞のタイプが異なる点であり，それに呼応して Locative の性質，特に前置詞，副詞の性質が異なってくるということである．つまり簡潔にいえば，「表現のタイプ」は異なるが，「語用論的特性，つまり表現から生ずる効果は同じ」ということになる．「まとめ」としてはこれに話者（＝観察者），聴者という要素を入れなければならないが，少し複雑になるので，話を分りやすくするために新たにＴＶカメラ，ＴＶ受像器という比喩を用いながら，整理してみたい．

	Locantive+Verb+Subject		
話者：ＴＶカメラ（＝観察者）＜表現の性質＞	verbs of motion	verbs of existence	異質な面
	直前のコンテクストと同じ位置で　固定撮影（視点：固定＝眼前に対象物が入っくる（事態））	直前のコンテクストから動いて　移動撮影（ある特定位置にきて対象物が現われる）	
読者：ＴＶ受像器（＝聴者）＜イメージの世界の映像＞	劇的効果を伴って視界に現われてくる：“coming iinto view”		共通な面

2つの構文に共通な性質としてのべた「劇的な効果を伴って視界に現われて来る」というのは，実は読者（＝聴者）のイメージの世界の映像における効果であって，これはＴＶ受像器の画面に現われた効果にたとえることができる．運動の動詞を伴う構文であろうと，存在の動詞の構文であろうと，読者（＝聴者）の脳裡に生じてくる効果は共通しているということである．これに対し話者（＝観察者）の側は，運動の動詞の構文と存在の動詞の構文の両方を用いるのであるが，運動の動詞の記述によれば，対象物（又は事態）が視界に飛びこんで来てくれるので，いわばＴＶカメラを直前のコンテクストの位置に固定しておいて充分であるのに対し，存在の動詞の記述では，話者は直前のコンテクストの視点から Locative で表わされた位置にまで視線を動かしてはじめて対象物が視界に現われてくるので，いわばＴＶカメラを直前の撮影位置からその位置まで移動させるかまたはカメラ・アングルを変えねばならないのである．

このように，話者は2つの相異なる撮影方法を用いて対象をＴＶカメラにおさめているわけであるが，読者（＝聴者）の方は，その撮影方法の差異にも拘らず，同じ劇的効果を伴って視界に現われる映像を味わっているのである．

註

① Christopher Longuet-Higgins (1976), "…And Out Walked the Cat", *Pragmatics Microfiche* I. 7.

② いわゆる End-focus の考え方でも説明できる．また，「文法上の構造にかかわりなく，ある文のテーマ（Theme）をＳとし，それについて情報（Information）を与える部分をＰとし，すべての文を，その文脈において S is P の論理的構造に還元して考える」（『意味論からみた英文法』p.144）という毛利可信教授の考え方とも軌を一にするものである．

③ ただし，ここでは(4)—(6)のような明確に区別できる closed space は関係していない．

④ また，Into the pub Stuart disappeared も同様問題はない．この文は基底として Stuart disppeared into the pub.と同じ構造をもつと考えられ，'into the pub' が

変形により前置されたと思われる．なお(11)が unacceptable であることから予想されるように "Locative+Verb+Subject"（以下 L+V+S）構文は，S+V+L 構文や L+S+V 構文と基底構造が異なると考えられる．

⑤ 強勢のない代名詞の場合は 'There is he' とはならずに 'There he is' となるのが普通である．例文の出典は毛利可信『語順』（研究社，昭和29年）p.20.

⑥ (11)の文についてもこのような説明ができないか，という疑問が残るかもしれない．(11)がおかしい主な理由は，*go away* があらわす動作はその動作の始動の時点から観察されうるのに対し，*disappear* はむしろ結果の表現であって，その始動の時点からは観察不可能な，というよりか始動と同時に完成してしまう動作をあらわしているため，その動作の過程は観察不可能だからである．日本語でも「あっ，逃げた」といって犬を追いかける様子は容易に想像できるが，「あっ，消えた」といった時には，もうすべて終っている．また，「いつの間にか 消えた」という表現がぴったりなことも上のことをうらづけるよい例である．それ故(11)は目の前に起った観察できる 'event' としては取り扱えない．